

○井元りえ\* 小澤紀美子\*\*

\*東京学芸大連合大学院, \*\*東京学芸大)

<目的> 温暖化防止等の地球環境問題解決のためにライフスタイルの変革が不可欠とされ、そのための一方法として環境家計簿が注目されている。本研究は、環境家計簿およびそれらの記帳結果調査資料を基にライフスタイルの特徴とその示唆する問題点を捉え、さらに現在の環境家計簿の利用の仕方を 1980 年代に盛岡らが提唱した環境家計簿の役割と比較し、今後の環境家計簿の役割と展望を考察することを目的とする。

<方法> 環境庁、自治体、各種団体および企業などで作成している環境家計簿 31 種類の内容を分析し、さらにそれらの記帳結果を集計した調査資料におけるライフスタイルの特徴と問題点を明らかにする。また、1980 年代に大阪大学の研究グループが提唱した「新しい家計簿」に関する論文や盛岡通著『身近な環境づくり』1986. に示された環境家計簿の役割を再考し、今後環境家計簿が果たす役割と展望について考察する。

<結果> 環境家計簿および記帳結果を集計した調査資料からは、ライフスタイルが住宅構造や生活時間と関連しており、社会構造や制度による制約を受けていることが明らかになった。また、盛岡らは、環境家計簿を、環境づくりの六段階のプロセスの中の第三段階において課題の明確化と目標設定を行うために利用するものであると位置づけており、その後市民と行政とが協力して環境づくりの行動や事業を実践することを目的としている。しかし、現在の環境家計簿運動は、家庭内の個人の努力のみを目的としており、社会システムとして問題を解決する視点に欠けている。